労働者階級のたたかう知性をつくる

2015 SPRING 180

# 社会評論

特集Ⅰ 巻頭エッセイ 春夏秋冬 **敗戦から70年、いま伝えたいこと** 15本

特集Ⅱ **女性労働者通信**——声をあげる女性たち 10本

労働者の立場から『日本再興戦略 改訂 2014』を読む＝吉良　寛

貧困と暴力に終止符を！——闘いは世界の女性とともに＝村上理恵子

●状況2015春――反戦

# 被害者が加害者を赦した歴史

## ――撫順戦犯管理所と中国帰還者連絡会

芹沢　昇雄（「NPO・中帰連平和記念館」事務局長）

### シベリアから中国へ

敗戦後、シベリアに六〇万人が捕虜として抑留され、炭坑や森林伐採、鉄道建設などの強制労働と、栄養失調や寒さで約六万人が犠牲になったと言われている。その中から九六九人が抑留五年後の一九五〇年、旧ソ連から独立間もない中国に「戦犯」として引き渡された。その収容先が遼寧省「撫順戦犯管理所」であった。そこはかつて日本が中国人収容のために造った撫順監獄である。（一部の「戦犯」は山西省「太原戦犯管理所」にも収容されていた）

「戦犯」たちは、シベリア各地から「ダモイ（帰国）」と騙され、トイレもない三段になった貨車に詰め込まれた。

その貨車が着いた先がソ満国境の綏芬河（すいふんが）で五〇年七月十八日だった。中国側で待機していたのは貨車ではなく客車であり、暖かい食事が用意され、医師と看護婦が乗り込み「戦犯」の体調まで気を配った。その待遇の違いに彼らは愕然とした。しかし、列車は西に進み日本へは向かわなかった。

列車は七月二十一日早朝三時「撫順城駅」に着き、管理所まで行進する「戦犯」たちの両側を、八路軍の兵士が銃を隊列の「外側」に向け警備していた。それは彼らを中国人の暴行から護るための極秘行動だった。

### 戦犯たちの戦争体験

「戦犯」たちはどんな戦争体験をしたのだろうか。中国の日本軍は初年兵教育の仕上げに、的の代わりに中国人を杭に縛り付け突き殺す「実的刺突」をさせた。ほとんどの人が最初の殺害はその恐怖から手足が震え、うまく突けなかったことを鮮明に記憶している。そして、上官から「そんな事で戦争が出来るか！」と叱責された。しかし、人殺しも何人かするうちに慣れてきて平気になる。彼らは『戦争は人間を人間でなくす』と言っている。

日本軍の補給の多くは「現地調達」つまり略奪であった。日本軍が集落に入る前に住民が逃げ出し、空になった民家に放火し、そして家具は「たき火」代わりに燃したのであった。

日本軍は中国各地で「殺し尽くし、焼き

尽くし、奪い尽くし」を実行し、これを中国側は「三光作戦」と名付けた。つまり、日本軍に「三光作戦」という作戦があった訳ではない（右翼はこれを以て「三光作戦などなかった」と主張している）。

「生体解剖」も石井四郎の「哈爾浜（はるびん）・七三一部隊（関東軍防疫給水部）」だけではない。山西省の潞安陸軍病院で軍医中尉だった湯浅謙（敬称略以降同じ）は、自ら七～八回に渡って十数人の中国人の「生体解剖」に立ち会っており、「生体解剖は七三一部隊だけでなく、何処の野戦病院でもやっていた」と証言している。河南省の一一七師団野戦病院の軍医中尉野田実も自らの生体解剖を証言している。

二〇〇〇年に従軍慰安婦問題を裁いた国際民間法廷『女性国際戦犯法廷』で加害証言（NHKがカットして放送）をした金子安次は「強姦させない」と怒った上官に「金子、足を持て」と言われ、上官と一緒に中国人女性を井戸に投げ落としている。さらに、その幼子が母を追い井戸に飛び込んだ後、金子は上官の命令でその井戸に手榴弾を投げ込んだことを証言している。

またチチハルの憲兵だった土屋芳雄は一九一七人を逮捕し三二八人をスパイ容疑で直接間接的に裁判も経ないまま「厳重処分」の名の下に殺害し、七三一部隊に送ったことも証言している。同じ憲兵だった三尾豊も生体解剖の実験材料として「マルタ（丸太）」と呼んだ中国人を拷問し「特移扱」（七三一に送る隠語）として四人を七三一部隊に送り込んだ。土屋と三尾は戦後、遺族の一部を探し出し直接謝罪している。

しかし、これらの人たちは決して特別ではなく、同じ部隊や同じ場所に居た人たちはほぼ同じ体験をしている筈だ。当時、中国人は人間扱いされず「チャンコロ」と呼ばれていた。畑仕事の男性を捕まえ労役に給した。小山一郎は「ウサギ狩り（強制連行）」と称してそれに自から参加したことを証言している。

## 管理所の人道的待遇

「戦犯」たちは管理所で一五、六人ずつ鍵を掛けられた部屋に収容された。壁に貼ってあった「戦犯監房規則」に反抗し、我々は上官の命令に従っただけで「捕虜であり、戦犯ではない」と抗議した。管理所はその訴えを聞き入れ「戦犯」の表記を外した。しかし、戦犯であることを否定した訳ではなかった。

当初、彼らは反抗していたが、管理所は何の強制もせず逆に彼らの「白米を食べさせろ」との要求さえも受け入れた。中国人がコウリャン飯を一日二食しか食べられない状況下で、当時の中国人数家族分の食糧が戦犯一人に与えられ、それを、彼らは「最後の晩餐」に違いないとさえ思った。

これは、周恩来の『戦犯といえども人間であり、日本人の習慣と人道を守れ』との指示があったからだ。しかし当然、看守たちは不本意であり、アルマイトの食器を蹴飛ばして運んだりしていた。しかし、周恩来は『制裁や復讐では憎しみの連鎖は切れない。二十年後には解る』と看守たちを諭し教育した。

その人道的扱いは何時になっても変わらなかった。しかし、「戦犯」たちは余ったご飯で麻雀牌を作ったり、将棋の駒や、歯磨き粉と油煙を混ぜて碁石を作ったりと何の反省もなく遊びほうけていたのだ。それでも「私たちは白米を食べられないのです。良く考えて下さい」と看守に言われるだけで叱責されることはなかった。

### 苦しい認罪への道

看守の態度が変わると彼らも反抗的ではなくなり、徐々に信頼関係ができ過去を振り返ることが始まった。部屋の鍵も外され仲間同士の交流もできるようになった。しかし、過去を振り返るのは容易ではなく、それは自ら加害の事実と「責任と罪」を認めなくてはならないことだったからだ。頑として認めない人、反省する人などそれぞれで、「お前がそんな事を言えば俺の立場はどうなる！」などと、喧々ごうごうの議論が始まる。時には部下が元上官に「○○と言ったでしょう！」と詰め寄る場面もあった。しかし、それを認めることは怖く処刑さえ覚悟する必要があった。

その恐怖から精神を患い便所のクレゾールを飲み自死した「戦犯」もいた。また便槽に飛び込み自殺を図ったものもいた。その時、看守が便槽に飛び込んで引き上げ、マウスツーマウスで糞尿を吸い出している現場を鈴木良雄らが見ていた。しかし、残念ながら亡くなったとのことだ。鈴木は前記の金子安次と共に「加害証言」をしたが、梅毒に罹り、当時、高価で入手困難なペニシリンを管理所で連日打ってもらい全快し、そのことを「命の恩人」と感謝していた。

管理所は決して強制はせず「過去を思い出して下さい」と言うだけで、反省する者には寛大措置を、反省のない者には罰が待つと伝えていた。

### 鬼から人間へ

彼らは徐々に反省し最初は「担白（自白）した方が有利のようだ」とソロバン勘定で針小棒大に言うと、嘘をついたり大げさに言ったり隠したりせず「事実を正直に」書くように諭された。次には事実は認めるが「上官の命令で自分はそんなに悪くない」と考える。しかし「それで被害者が納得しますか？」と問われる。そして、最後には虐殺した中国人を自分自身や自分の家族に置き換え認罪し、「鬼から人間に戻してくれた」と管理所の六年に感謝するようになった。ここに達するまでに約四年という歳月が必要だったのである。

ある日、全員の前で三九師団二三二連隊の中隊長宮崎弘が住民の拷問・虐殺などを涙ながらにすべて暴露し、「如何なる厳重な処罰をも受け入れる覚悟です」と発言し、彼らに大きなショックを与えた。彼らはそれをキッカケに積極的に過去を振り返るようになったが、やはり高級将校ほど反省は進まず後になった。

やがて彼らはスポーツやブラスバンドなどの部活を始めたが、その楽器や道具はすべて管理所が揃えてくれた。そして「体がなまってしまう」と瓦生産を始めた者もいたが、これも強制ではなかった。

### 赦された戦犯たち

一九五四年十月に中国・紅十字会の李徳

安里ミゲル Asato Miguel 詩集
好評発売中 名詩、産ス名
2010円＋税
悪い詩集
又は詩的唯物論神髄の大盛　2666円＋税
日本は、不幸にも、今はファシズム体制に突入しました。……安里健さんの数篇の詩作品には、バイタリティ、オリジナリティ、パーソナリティが、きわどく育っています。そして、権力に対して、徹底的にたたかいの作業をつづけているのです。
（長谷川龍生「推薦の冥利」より）
スペース伽耶　☎03・5802・3805　FAX 03・5802・3806

全女史の来日で初めて名簿が発表され、留守家族に「戦犯」たちの生存が確認され交流も出来るようになった。そして、五六年六月～八月にかけ三回に分け一四〇〇人の中国人被害者家族などが傍聴するなか、瀋陽で「特別軍事法廷」が開かれた。その判決には一人の「無期も死刑」もなく一〇六二名の戦犯のうち起訴されたのは政府・軍高官の僅か四五人だけで、他全員が「起訴免除」だった。傍聴席からは「そんなバカなことがあるか！」と怒号が飛んだが、裁判長は木槌を叩き「これは上部からの命令であり、死刑にしてはならないのである」と宣言した。「判決原案」には死刑や無期もあったが、周恩来がそれを認めず三回も書き直しを命じた結果であった。偽満州国官僚トップの国務院総務長官の武部六蔵は、病のため病室で「禁固二十年」の判決を言い渡された直後、「病のため直ちに釈放」と伝えられ、ベッドで号泣している写真がある。

中国が「賠償請求権」を放棄したことは知られているが、一番被害の大きい中国が加害者を赦し「一人の無期も死刑も認めなかった」歴史の事実をどれだけの日本人が知っているだろうか。東京裁判の他、アジア各地でB、C級戦犯約一千人が処刑されている。周恩来は「信頼関係」を築くことで平和を維持することを信じたかったのである。上意下達が絶対の国ゆえ出来たことでもあり、また、独立直後の「国策」でもあったに違いないが、間違った判断ではなかったと思う。

起訴された四五人は禁固八～二〇年だったが、シベリアの五年と戦犯管理所の六年の計十一年が刑期に参入され、ほとんどが刑期満了前に帰国を許され、三回に分け六四年四月までに全員帰国した。帰国に際して中国から新しい服に靴や毛布、そして現金五十元まで貰いそのお金でお土産まで買って帰国したのだ。しかし、帰国した舞鶴で政府から軍服を支給された彼らは「これを着て再び戦えというのか！」と怒り、見舞金一万円の低さにも抗議しその金額の引上げも実現している。

## 「中帰連」立ち上げとその後の活動

しかし、帰国すると彼らには「アカ、洗脳者、大陸帰り」など偏見とレッテルを貼られ常に公安警察が付きまとい、多くの人たちは就職が困難であった。また、帰国するとすでに葬儀を済ませ妻が再婚している悲劇もあり、家庭を壊さないようそっと去って行った人たちもいた。

彼らは帰国後まだ生活さえままならない中で、帰国翌年の五七年九月に「中帰連」[1]を立ち上げ、八八年十月には六八〇万円を集め撫順戦犯管理所に立派な『謝罪碑』を建立した。そして高齢のため二〇〇二年四月に解散するまで、自らの加害・虐殺や戦争体験を証言しながら「反戦平和と日中友好」を願い運動を続けたのである。

そして、「中帰連」の思いを理解・支持する若者や、中帰連の「賛助会員」などが中心になり中帰連解散の翌日に『撫順の奇蹟を受け継ぐ会』を立ちあげて運動を受け継いでいる。また、中帰連の「資料散逸」を防ぐために、〇六年に埼玉県川越市に『中帰連平和記念館』を立ち上げ、現在NPO法人として活動している。記念館には中帰連関連資料の他に一般の戦争関連図書や映像なども保存している。起訴された四五人の「供述書」コピーや「戦犯」たちが当時管理所で書いた「手記」原本、自費出版本など貴重な資料を保存している。また都立大学総長だった故山住正己の蔵書も

「山住文庫」として寄贈されている。

世界各地で三年に一回開催される『国際平和博物館会議』が昨年九月に韓国・ノグンリで開催され、松村高夫理事長（慶応大学名誉教授）の発表が高く評価された。また国内の『平和博物館ネット』などにも参加している。

記念館では内外の学者・研究者、NHKなど各メディアなどにも資料提供し、プロジェクターで映像を視ることも可能だ。狭い館内であるが紙や映像資料だけでなく、パネルや物の「展示」なども現在検討中だ。会員以外にも呼びかけ定期的に「勉強会、研究会、講演会」なども開催し、ホームページやメーリングリストも開設している。

## 結び

いま安倍政権は特定秘密保護法の強行採決で市民の耳目を塞ぎ、更に、集団的自衛権の閣議決定、文官統制の排除、外国船への臨検強行、米軍以外への後方支援や武器弾薬も運ぶと暴走している。

中国が賠償請求権を放棄し、特別軍事法廷で死刑も無期も認めなかった事は、日本が『侵略・加害を認め反省する』という前提・約束で赦された事を忘れてはならない。それ無くして日中友好はあり得ず、私たちはその加害と責任をキチンと認め原点に立ち返るために努力を続けたい。

私たちは周恩来の「信頼関係を築き平和を守る」思いを理解し、憲法前文の『平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼し』を信じ平和を守って行きたいと思う。そのためにはこの歴史の事実を伝え続けなくてはならない。ヴァイツゼッカー元独大統領の『過去に目を閉ざす者は現在にも盲目となる』との有名な言葉があるが、中国にも『前事不忘　後事之師』というまったく同じ諺がある。私たちはこの言葉をシッカリ噛みしめたいと思う。

（※1）「中国帰還者連絡会」を略して「中帰連」と言う。

●共産党・労働者党アテネ会議資料集 Ⅱ
統一戦線の構築をめざして
帝国主義の攻撃に対峙し社会主義的解決へ向けて、統一した行動の必要性を強く訴えている。
発行＝日本語版編集委員会頒価＝一〇〇〇円
小川町企画
☎03-3818-6671 FAX03-3818-3199

ソ連はなぜ崩壊したのか
――英雄的たたかいと苦い敗北
バーマン・アサド著

実在の社会主義の欠陥を「人類の達成物の現時点における限界」という見地から分析し、その克服をめざした労作。
A5判196頁・定価2300円+税
スペース伽耶
☎03-5802-3805